

## 相模海軍工廠・寒川と平塚にあった秘密毒ガス工場

北 宏一朗

2002年9月神奈川県寒川町で毒ガス被害が出ました。寒川にあった旧海軍の秘密毒ガス工場内の工事現場から「びらん性毒ガス・イペリット(マスタード)」と「催涙ガス・クロロアセトフェン」の入ったビール瓶が発見されましたが、その際工事関係者11名が負傷しました。そのうち1名から染色体異常が見つかっています。その後「びらん性毒ガス・ルイサイト」の入った瓶も発見され総数は、802本(2004年3月31日現在)にのぼります。そして昨年3月茨城県神栖町で「毒ガスの嘔吐剤(くしゃみ剤)」による有機ヒ素化合物によって地下水が汚染され住民に重大な健康被害が出ました。水質検査によれば環境基準の450~17,000倍の有機ヒ素化合物が検出され被害は拡大しています。更に4月神奈川県平塚市の工事現場から旧海軍の使った「硫酸ビン(煙幕として使用)」、土壌からマスタード(イペリットのこと)、くしゃみ剤の毒ガス成分、致死性の青酸(シアン化水素)も検出された。総数は445個(2004年3月31日まで)、現場は、相模海軍工廠平塚化学実験部の跡地、工事中に作業員が負傷し、今もって原因が明らかにされていません。更に8月には中国チチハル市で日本軍の遺棄した毒ガス(イペリット缶)で死者1名、負傷者40名以上という惨事が起っています。9月には福岡県荻田町荻田港周辺海域で毒ガス弾の可能性の高い爆弾538個が発見されています。

旧日本軍の作った毒ガス、戦時中は国際法違反の軍極秘の毒ガス工場、陸軍と海軍が共に研究、開発、実戦に使用、そして隠ぺいされてきた実態…日本の侵略戦争と共に使用され、戦後なお隠し続ける化学兵器の数々、歴代政府による遺棄毒ガス処理の抜本的な対策は無にひとしく、それによって被害は今日に至るまで続いています。

海軍の毒ガス工場・相模海軍工廠(寒川町)で、どのような化学兵器が作られていたのか、化学実験部=海軍技術研究所(平塚)では?

平塚にあった海軍技研は現在美術館、警察署、合同庁舎建設現場(ここから大量の毒ガス(主に青酸)瓶が出てきている)から北側高砂香料、不二家、パイロットにわたる一帯に研究、実験、製造工場等があり、毒ガス生産の規模拡大の為、寒川に大規模な毒ガス工場を作りました。海軍は毒ガスのことを特薬と名付け(陸軍は色で呼ぶ)、1号特薬(催涙)(緑)、2号特薬(クシャミ)(赤)、3号特薬甲(びらん)イペリット(黄1号)乙(びらん)、ルイサイト(黄2号)4号特薬(致死)青酸(茶)があり、他にホスゲン(青)、窒素イペリットガス等があり、細菌兵器として11号特薬もある。兵器として砲弾、爆弾(30kg、60kg)、手投弾、噴射、雨下散布等が作られ、他に風船爆弾発火剤用エチル亜鉛(ガラス瓶)数万個、サイダー瓶に詰められた青酸1万本、そして細菌兵器の数々、敗戦時、戦犯逃れの為、そのほとんどが遺棄、隠匿され、全国に及ぶ。

平塚にあった第二海軍火薬廠(当時東洋一と云われた規模)の相模川寄りの一角に海軍技術研究所が築地から移転し(昭和5年)毒ガスの研究・開発・製造が行われ、規模拡大の為、相模川対岸の寒川町一の宮に大規模な毒ガス製造工場を作り(昭和18年)、名称を相模海軍工廠とし、平塚の海軍技術研究所は化学実験部となり、毒ガスはもとより、生物兵器全般の研究・開発にあたりました。更に錦出張所(福島県小名浜)、多摩出張所(八王子市川口町)、上田出張所(長野県上田)を開設疎開工場としました。

一毒ガス工場の恐ろしさ一

「顔は黒く、目は赤く、肺はただれ、集会の折、駆け足で来る第2工場(イペリット)の人達は咳が止まらず、血を吐いていた」(日川中学動員学徒証言)

「昭和20年5月頃、30名程の朝鮮少年工(16才~20才前)が宮前寮の一室で、ガスにやられ死んだ様になっていた。」(湘南中学学徒証言)

国家総動員法(昭和13年)国民徴用令(15年)により毒ガス工場には昭和16年から20年5月まで合計21回の徴用工が配属され、2000名を超える労働者が強制的に働かされました。更に学徒動員、女子挺身隊、そして朝鮮から強制連行(徴用工と称している)した朝鮮人。

まさか自分が毒ガス工場に連れてこられるなど誰一人思ってもいませんでした。更に軍機密として「生涯口にするな」と...

動員学徒は大学生もいましたが、主に静岡、神奈川、山梨の中学生一湘南中学(藤沢)、相洋中学(小田原)、日川中学(山梨)、伊東高女(伊東)、豆陽中学(下田)、平塚高女(平塚)等でした。

15才~16才の少年・少女も含む総数3000名以上を「海軍魂・精神棒」と書いた丸太で殴り、或いは「対抗ビンタ」等で威嚇し毒ガス生産にあたらせたのです。60kgイペリット爆弾を中心に1号特薬(催涙)、2号特薬(嘔吐)、3号特薬甲(びらん)、イペリット、同乙(ルイサイト)、4号特薬(青酸)等が作られました。

これらの化学兵器・毒ガス兵器はどこに送られ、敗戦時にはどこに隠匿されたのでしょうか。その多くが中国大陸へ、そして南方へ、対ソ戦用に北方に配備、最後には本土決戦用として(決号作戦)大量の毒ガス兵器が配備されました。陸軍毒ガス工場の久野島(広島)には現在も地下壕に大量の毒ガスが埋蔵されています。北海道美幌基地の地下壕にある60kgイペリット・ルイサイト混合爆弾(不凍)、福岡県荊田港周辺海域に放置されたまま538発にのぼる爆弾、寒川町岡田にある特殊地下壕に隠匿された各種毒ガスの原材料、毒ガス兵器、隠匿された陸・海軍の化学兵器、毒ガス兵器は今日に於いても、その毒性はおとろえることもなく地下に、地中に、海中等に眠っています。国内にとどまらず、中国をはじめ東南アジア全域に、南洋諸島に及んでいます。

一毒ガス、化学戦、悪魔のネットワーク一

昭和15年、海軍技研(平塚)に陸軍参謀総長、閑院宮(中国での毒ガス戦を指揮、大陸指令110号)、前年には東久彌が視察に訪れています。毒ガス戦将校養成機関としての陸軍習志野学校に技官を派遣。化学部隊の創設、更に陸軍技研から細菌戦の資料をとり寄せ、研究開発を進めていました。(1号兵器)。昭和17年「決戦兵器考案ニ関スル作戦上ノ要望」を陸・海軍で協議、昭和19年1月「大陸指令1822号、化学戦準備要綱書」に記載されている「化学戦ノ準備ノ実施ニ於テハ密ニ現地海軍ト連携スルモノトシ」秘匿名G作業ト定ムに見られるように、陸・海軍の化学戦・毒ガス戦は両者の緊密な関係を抜きにしては語れません。

相模海軍工廠、海軍技術研究所こそ、陸軍の大久野島、科研、登戸研究所と対をなす化学戦の重要なネットワークの一部と位置づけられます。

日本政府には、陸・海軍の行った秘密の化学戦の全容を明らかにする義務と責任があり、遺棄・隠匿された毒ガスの回収・無害化を国内外にわたって一刻も早く進めなければならない。何故ならば毒ガス兵器は生きており、いつ住民に襲いかかるかわからないからです。



科研を視察する昭和天皇(中央)。久村所長が先導している(元科研職員の小野田悦郎さん提供)。

一本土決戦に備える毒ガス部隊一

環境省が発表した('03.11.28)、昭和48年「旧軍毒ガス弾等の全国調査」フォローアップ調査報告書によれば、神奈川県に於いては12ヶ所、平塚(海軍技術研究所跡地)、寒川(相模海軍工廠跡地)、そしてその中に茅ヶ崎市の事案(神奈川14-9)がある。

1983年6月4日付朝日新聞は「茅ヶ崎、旧軍の青酸ガス弾、学校跡地から発掘、作業の人やけど」と報じた。場所は茅ヶ崎市富士見町の私立「平和学園」(現アレセイア湘南)の敷地内、幼稚園の裏側、深さ2.5mの所から球状のビンが300個以上、旧海軍の青酸ガス弾と見られていたが、後に塩素系の催涙手投げ弾119個と発表され、自衛隊によって処理されたとある。昨年平塚で発見された球状の青酸手投げ弾のことを考えると119本以外のビンの内容が不明にされたままが不自然である。この現場は昭和20年5月から海軍砲術学校があった場所とされ、フォローアップ調査では現在の状況として、「鉄筋4階建の教育施設が建っていて、井戸水は飲用していない。旧海軍砲術学校について、学校そのものが存在していない」と記されている。

敗戦直前、湘南海岸に毒ガス兵器を装備した海軍砲術学校とその部隊は幻だったのであろうか。そして毒ガスはこれだけだったのだろうか?

昭和20年4月1日、海軍大臣内令第278号海軍省内に海軍化兵戦部発足(高田利雄少将)主に相模海軍工廠北里又郎中佐、館山砲術学校大川秀四郎少佐を中心に化兵戦実施部隊の編成・整備にあたる。敗戦前に毒ガス部隊が突如計画されたものではなく、昭和18年館山海軍砲術学校(陸戦及び陸上対空担当の術科学校)に化兵戦の研究・教育が行われていた。

昭和18年5月には、大川中佐を中心に士官2名、下士官6名を陸軍習志野学校(毒ガス戦将校養成の秘密学校)に派遣、後に彼らが、教官、教員にあたった。この年は相模寒川本廠が完成、毒ガスの大規模生産が始まった年でもある。昭和20年6月館山砲術学校と横須賀海軍砲術学校が併合し、化兵戦の研究・教育は横須賀砲術学校の所管となった。養成要

員は士官250名、要員450名であった。

先の茅ヶ崎の砲術学校は、この部隊をさしてあり、昭和20年5月から水野大尉を長とする水野部隊100名が辻堂(平和学園)に配備され、兵舎として幼稚園を接収していた訳です。彼らは本土決戦(昭和19年4月決号作戦)の為、赤柴中将を長とする第12方面軍53軍と共に毒ガス兵器を装備して湘南海岸に配置されていた。彼らのいた平和学園から程近い辻堂海岸には、大正15年から海軍の演習場があり、ここで、海軍技術研究所が築地時代から研究開発した各種の毒ガス兵器の実験を繰り返し行っていた。敵上陸を想定しての波打ち際イペリット散毒等も行われ、上記部隊員は「毒ガスマスクを付けて江ノ島までの行軍はつらかった」と述懐している。現在ここは辻堂団地、県営辻堂海浜公園になっている。決号作戦では米軍上陸地点を鹿島灘、九十九里浜、相模湾の3地点を予想、相模湾の沿岸陣地は鎌倉山と大磯の千畳敷山(現湘南平)を両肩とし、茅ヶ崎小出から藤沢の丘陵地帯に陣地(地下壕)を構築、玉砕覚悟の作戦を立てていました。ここに毒ガスは配備されていなかったのか、平塚・寒川・茅ヶ崎と本土決戦用毒ガス兵器が次々と現われ、環境省発表県下12ヶ所のうち湯河原吉浜にあった陸軍第6技術研究所(陸軍の毒ガス・細菌戦等の研究・開発機関・平塚の海軍技術研究所と密接な関係)吉浜出張所があり、敗戦後初島沖に海中投棄された(現物は今も海中にある)。相模川河口すじの海中にも大量のイペリット入りのドラム缶等が投棄されたままになっている。

平塚の海軍技術研究所・相模海軍工廠(寒川)で研究開発され実戦配備された各種毒ガス兵器は上記の技官を通じ、南方ラバウル、トラック、サイパン、フィリピン、インドネシア、南洋諸島に配備された。

環境省は平和学園(現アレセイア湘南)の毒ガス発見現場周辺の再調査をすみやかに行うと同時に、本土決戦用に構築された各種の特殊地下壕(寒川・岡田の全長3kmの地下壕、藤沢大場城駐公園地下壕、大磯海軍陣地等)の再調査、毒ガス部隊となった各地海兵団の実態を明らかにするべきである。

1987.4.7  
(朝日新聞)

# 日海軍の毒ガスに新資料

## 本土決戦へ相当量備蓄

### 米軍報告書

第二次大戦中の日本海軍の毒ガス兵器研究、生産などについて全容をまとめた米軍の報告書が、六日米下院の「米軍公文書館」から見つかった。致死性の高い毒ガスである「リット」の年間生産量は終戦前の時点で、陸軍より海軍の方が多し、国内には本土決戦に備えて相当量の毒ガス兵器を貯蔵していたほか、占領地前に海軍司令部の指示で、保管していた大量の毒ガス兵器を廃棄したことも明らかになった。資料は占領地中に米軍側が当時の日本軍関係者の毒問をもとに作成したもので、海軍の毒ガス開発、製造について詳細な資料が見つかったのは初めて。

資料の表題は「日本の化学戦兵器に関する情報報告」。荒石敬一・神奈川大学教授（科学史）、長島修・立命館大学教授（日本経済史）が、研究資料を調査中に、報告書中の毒ガスに関する部分を見つけた。毒ガスの開発研究、生産、貯蔵への補給システムと貯蔵設備、化学戦訓練などにわかれ、全体系はAからHのレポート用紙で約六百五十枚

以上、いずれも昭和二十一年五月、研究規模を拡大。戦局に不利が見えた十八年に毒ガスの製造の拠点を相模海軍工廠に移した。戦時、三百人が勤務していた。ガスを製造する設備、汚染除去装置のほか、びん、くしなどの各種容器、毒ガス製造所を製造。陸軍の毒ガス製造所とを製造している。戦時、三百人が勤務していた。ガスを製造する設備、汚染除去装置のほか、びん、くしなどの各種容器、毒ガス製造所を製造している。

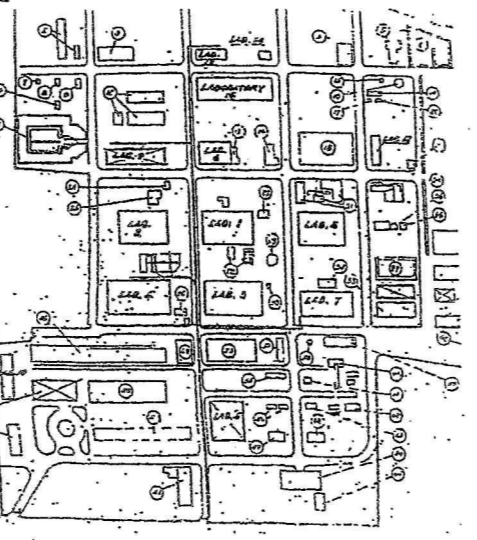
戦時、三百人が勤務していた。ガスを製造する設備、汚染除去装置のほか、びん、くしなどの各種容器、毒ガス製造所を製造している。

五千人の従業員を抱えていたのに比べると、規模は小さいが致死性の高い「リット」の年間生産量は終戦前の時点で、陸軍より海軍の方が多し、国内には本土決戦に備えて相当量の毒ガス兵器を貯蔵していたほか、占領地前に海軍司令部の指示で、保管していた大量の毒ガス兵器を廃棄したことも明らかになった。資料は占領地中に米軍側が当時の日本軍関係者の毒問をもとに作成したもので、海軍の毒ガス開発、製造について詳細な資料が見つかったのは初めて。

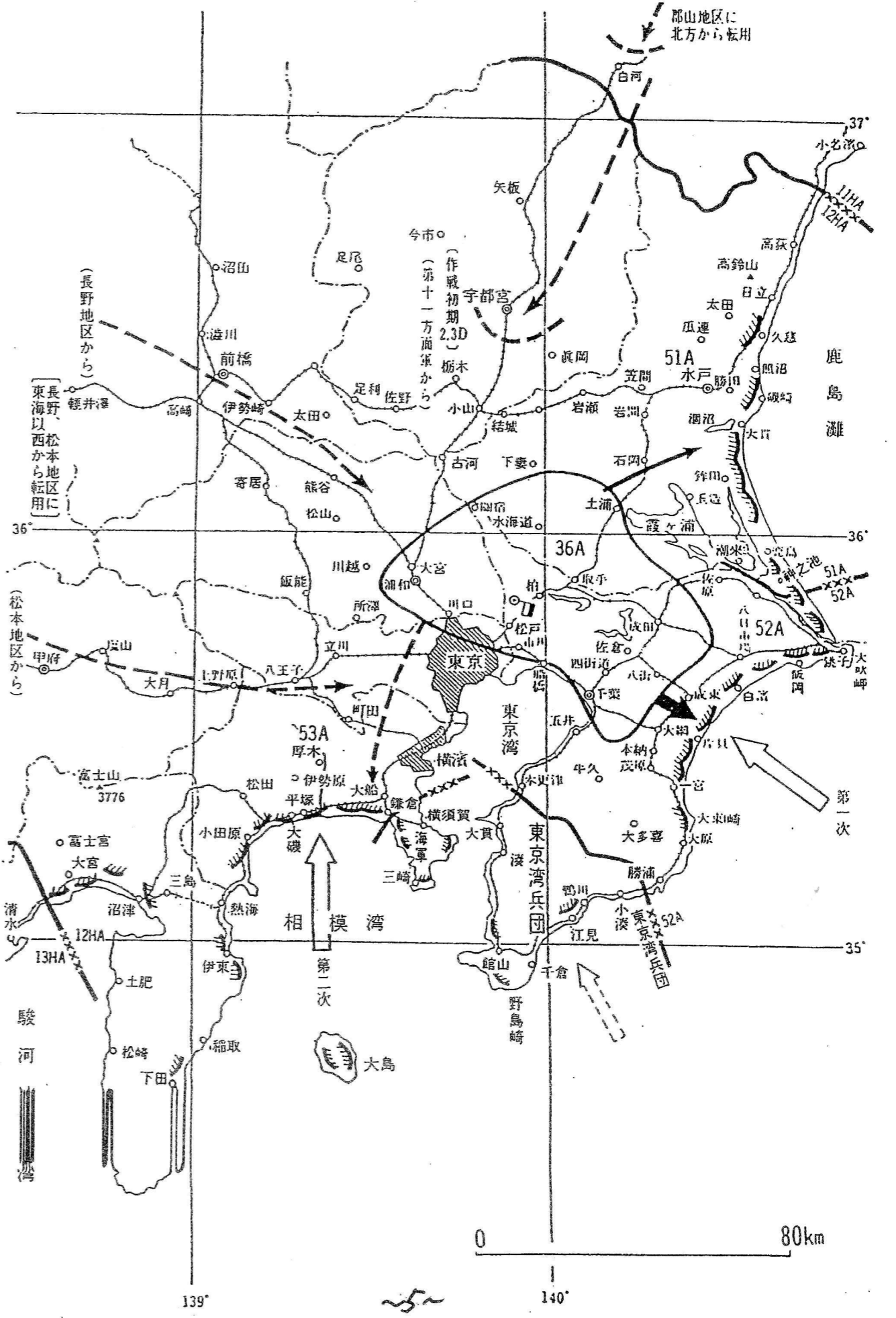
戦時、三百人が勤務していた。ガスを製造する設備、汚染除去装置のほか、びん、くしなどの各種容器、毒ガス製造所を製造している。

戦時、三百人が勤務していた。ガスを製造する設備、汚染除去装置のほか、びん、くしなどの各種容器、毒ガス製造所を製造している。

戦時、三百人が勤務していた。ガスを製造する設備、汚染除去装置のほか、びん、くしなどの各種容器、毒ガス製造所を製造している。



相模海軍工廠の化学兵器研究施設の敷地見取り図。中央にLABORATORY (実験室) と書かれた施設が14棟あり、実験室は線路でつながっていた。ほかに、毒液貯蔵庫、毒液倉庫、ガスタンクなど数十棟あり、コンクリート壁で囲ま





日本海軍の毒ガス弾・毒ガス爆弾の種類と諸元

弾種		填毒物	填毒量 kg	重量 kg	備考
迫撃砲弾	3式8cm迫撃砲1号特弾	塩化アセトフェノン	0.328	3.8	
	93式15cm迫撃砲2号弾	ジフェニルシアンアルシン	2	20	
	93式15cm迫撃砲3号弾	イペリット	4.3	20	
艦砲	15cm砲4号通常弾型薬改2	塩化アセトフェノン	0.075	—	
		ジフェニルシアンアルシン	0.29	—	
	50口径14cm砲2式通常弾型薬改2	塩化アセトフェノン	0.073	—	
		ジフェニルシアンアルシン	0.29	—	
	12cm砲3号通常弾型薬改2	塩化アセトフェノン	0.3	—	
	砲弾	50口径12.7cm砲通常弾型薬改2	塩化アセトフェノン	0.39	—
50口径12.7cm砲通常弾持久性化兵弾		イペリット (50%)	1.181	—	
		ルイサイト (50%)			
40口径14cm持久性化兵弾	イペリット (50%) ルイサイト (50%)	1.758	—		
爆弾	6番1号陸用爆弾	イペリット	17.1	68	
	仮称6番1号陸用爆弾甲	イペリット	22	51	弾体木製
	1式6番1号陸用爆弾1型	ジフェニルシアンアルシン	9.2	43.1	

館山海軍砲術学校「化兵戦要表 甲」1945年3月調整（防衛庁防衛研究所図書館所蔵）より作成。

表5-2 日本海軍の地上戦用毒ガス兵器の種類と諸元

名称		填毒物	填毒量 g	重量 g	高さ mm	直径 mm	
手投涙弾	甲	大	塩化アセトフェノン	12	130	84	55.1
		小	塩化アセトフェノン	7.2	100	64	55.1
	乙	大	塩化アセトフェノン 溶剤	20 190	420	102	52
		小	塩化アセトフェノン 溶剤	10 80	220	81	48
催涙筐 改一		塩化アセトフェノン	2300	13300	336	252	
仮称 特煙筒	大	ジフェニルシアンアルシン	2500	13300	336	252	
	中	ジフェニルシアンアルシン	350	1700	191	114	
	小	ジフェニルシアンアルシン	5	100	68	40	
仮称 手投特弾	液体青酸		210	1200	サイダー瓶		
	安定剤（三塩化砒素）		2.1				

館山海軍砲術学校「化兵戦要表 甲」1945年3月調整（防衛庁防衛研究所図書館所蔵）より作成。

日本陸軍の主な毒ガス兵器

使用区分	名称	制式化年	
砲兵用ガス弾	きい弾	75mm野山砲用92式きい弾	1932
		100mm榴弾砲・加農砲用92式尖鋭きい弾	1932
		150mm榴弾砲用92式尖鋭きい弾	1932
		94式軽迫撃砲用95式きい弾	1935
	あか弾	75mm野山砲用92式あか弾	1932
		100mm榴弾砲・加農砲用93式尖鋭あか弾	1933
		150mm榴弾砲用93式尖鋭あか弾	1933
		94式軽迫撃砲用95式あか弾	1935
	あを弾	150mm榴弾砲用93式尖鋭あを弾	1933
		軽迫撃砲用試製99式重あを弾	1935
	あをしろ弾	75mm野山砲用92式あをしろ弾	1932
		100mm榴弾砲・加農砲用92式尖鋭あをしろ弾	1932
150mm榴弾砲用92式尖鋭あをしろ弾		1932	
ちや弾	75mm野山砲用97式ちや弾	1937	
	100mm榴弾砲・加農砲用97式尖鋭ちや弾	1937	
	150mm榴弾砲用97式尖鋭ちや弾	1937	
	軽迫撃砲用試製99式重ちや弾	1939	
ガス放射筒	あか筒	92式あか筒	1932
		試製93式あか筒	1933
		97式中あか筒	1937
		98式小あか筒	1938
		試製98式中あか筒	1938
		試製98式発射あか筒	1938
		試製99式小あか筒	1939
		試製99式中あか筒	1939
		試製99式大あか筒	1939
		試製99式発射あか筒	1939
		試製100式あか筒	1940
		試製100式中あか筒	1940
		試製100式大あか筒	1940
		試製100式発射あか筒	1940
		試製1式大あか筒	1941
		みどり筒	89式みどり筒（甲・乙・丙）
	拳銃用ガス弾	14年式拳銃用90式みどり弾	1930
手投・擲弾筒用ガス弾	92式あか曳火手榴弾	1932	
	92式みどり曳火手榴弾	1932	
	1式手投丸缶（ちび）	1941	
教育・演習用資材	89式みどり棒 93式代用あか筒	1929 1933	
きい剤撒布器	94式きい剤撒布器	1934	
	95式手撒撒布器	1935	
	100式手撒撒布器	1940	
ガス噴射器	100式携帯噴射器	1940	
撒毒車	94式被牽引式撒毒車	1934	
航空機投下ガス弾	きい弾	92式50kg投下きい弾	1932
		94式50kg投下きい弾	1934
		97式50kg投下きい弾	1937
		100式50kg投下きい弾	1940
	あか弾	95式15kg投下あか弾	1935
		97式15kg投下あか弾	1937
		4式50kg投下あか弾	1943
	あをしろ弾	92式50kg投下あをしろ弾	1932
		97式50kg投下あをしろ弾	1937
		100式50kg投下あをしろ弾	1940
	ちや弾	95式50kg投下ちや弾	1935
		97式50kg投下ちや弾	1937
100式50kg投下ちや弾		1940	
雨下弾	1式50kg投下雨下弾	1941	
航空機用きい剤撒布筒	1式50kg撒布筒	1941	
航空機用ガス雨下器	94式ガス噴射器	1934	

土壌汚染目録の毒ガス調査

1972年大久野島周辺を含む全国各地で、旧軍の毒ガスによる被害が多発。全国調査を行い、1973年環境庁の「旧軍毒ガス弾等の全国調査」としてまとめた。それによれば被災・負傷者129名、死者4名となっていたが、調査結果が公表されることはなかった。

2002年～2003年に神奈川県寒川町・茨城県神栖町、平塚市と毒ガス被害が確認されたことにより、2003年11月28日環境省により「全国調査710-P77報告書」がまとめられ発表された。1945年～2003年まで生産・保有34ヶ所、廃棄・遺棄44ヶ所、被災者見823件、うち被災129件(死者11名、負傷者355名)不明多数

～戦後の歴代政府・国の不作為の結果、国内外で増え続ける被害者と恐るべき環境汚染。～

旧軍における名称	化学物質の名称	区分
きい剤 (3号特薬甲) (3号特薬乙)	マスタード (イペリットともいう)、 ルイサイト、及び両化学物質の混合物	びらん剤
あか剤 (2号特薬)	ジフェニルシアンアルシン (DC, ジフェニルシアンアルシンともいう) ジフェニルクロロアルシン (DA)	くしゃみ剤 (嘔吐剤)
みどり剤 (1号特薬)	クロロアセトフェノン	催涙剤
あお剤	ホスゲン	窒息剤
ちゃ剤 (4号特薬)	シアン化水素	血液剤
しろ剤	トリクロロアルシン	発煙剤

注) 旧軍毒ガス弾等の区分と毒性 ( )は海軍の名称。

(1) びらん剤

硫黄マスタードとルイサイトが代表的であり、両化学物質は蒸発速度が遅く、細かい霧状または水滴状で用いられることが多い。皮膚浸透性を有しており防毒マスクだけでは防ぐことはできない。マスタードは皮膚に付着すると数時間後に赤い斑点を生じ痛みを伴うびらん症状を呈する。目や呼吸器の粘膜を冒し水疱、潰瘍を生じる。ルイサイトはマスタードより効果が現れるのが早く、皮膚に付着したり目に入ると耐えがたい痛みを生じる。旧日本軍のきい剤はマスタードとルイサイトが主成分である。

(2) くしゃみ剤 (嘔吐剤)

ジフェニルシアンアルシン (DC)、ジフェニルクロロアルシン (DA) やアダムサイトのような有機ヒ素化合物があり、低濃度で鼻、喉、目の粘膜に激しい刺激を与え、くしゃみ、咳、前額部に痛みを感じ、高濃度では呼吸器深部を冒し、嘔吐、呼吸困難、不安感を生じ死亡する例もある。旧日本軍のあか剤はDC、DAの混合物である。

(3) 催涙剤

クロロアセトフェノンやクロロベンジルマロニトリルのようなハロゲン化合物であり、目や喉を刺激して激しい催涙効果を示す。死に至らしめることはほとんどなく、暴動の鎮圧用に配備されていた。

(4) 窒息剤

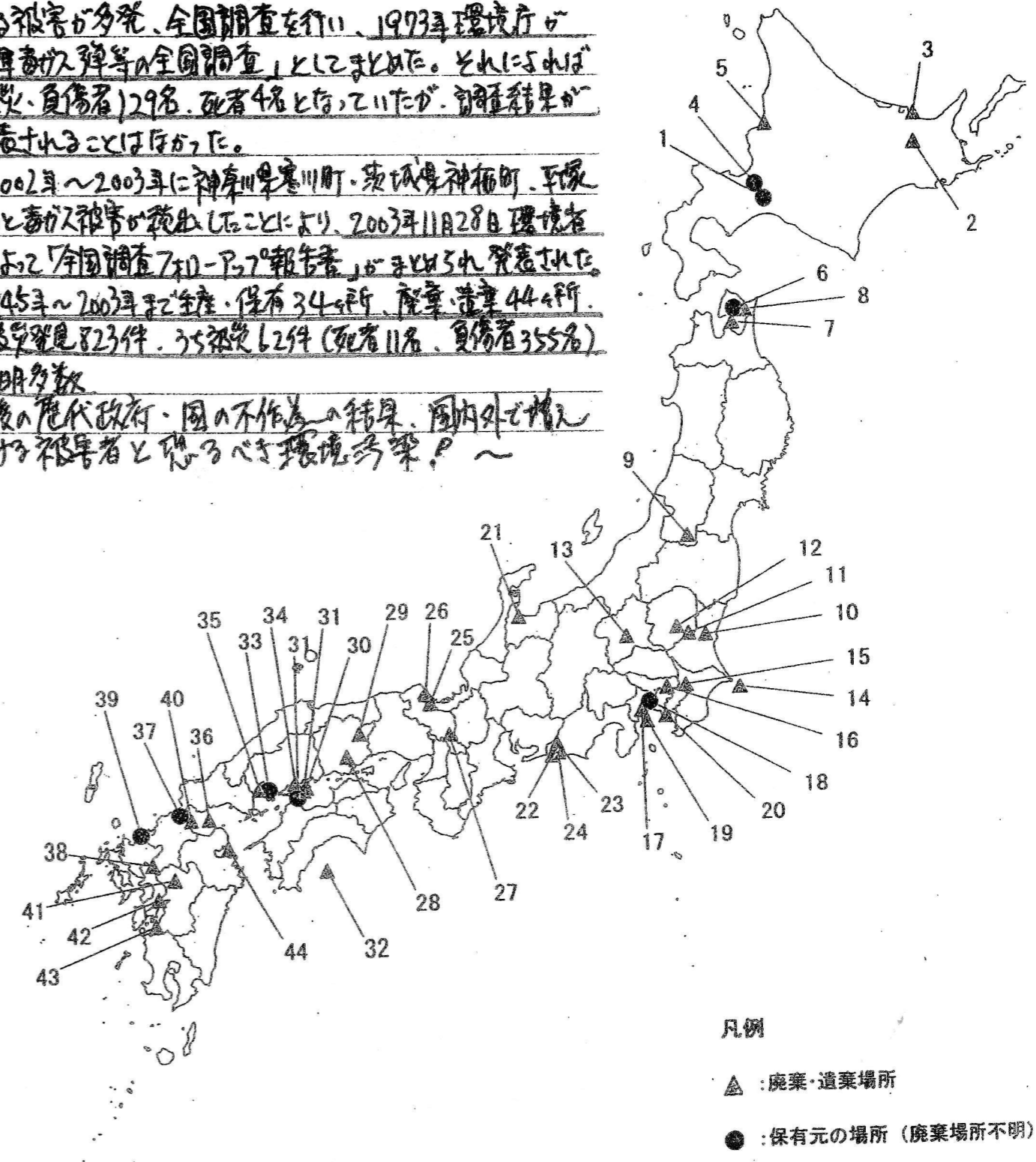
呼吸器系に作用して喉や気管支を刺激し、肺に障害を起こして死に至らしめる。塩素やホスゲンが代表的な化合物である。

(5) 血液剤

青酸ガスが代表的な化合物で、体内に吸収された後、血液成分 (ヘモグロビン)、全身の組織に作用して呼吸器障害を起こし、睡眠を伴い死に至らしめる。窒息剤や血液剤は、揮発性が高く呼吸器を通して作用するので、防毒マスクを着用することで防ぐことができる。

(6) 発煙剤

空気中で発煙し、刺激性がある。高濃度では、眼、皮膚、気道に対して腐食性を示し、この蒸気を直接吸入すると重症では排水腫を起こす場合がある。



1973年(昭和48年)「旧軍毒ガス弾等の全国調査」  
710-P77調査報告書 2003年11月  
<環境省>

旧軍毒ガス弾等の廃棄・遺棄状況

出典: 遺棄化学兵器の安全な廃棄技術に向けて (日本学術会議報告平成13年7月)  
International Chemical Safety Cards(ICSC 1989) 他

熊本川、茨城の西郷で旧日本軍が製造した毒ガスが原因とみられる健康被害が相次ぎ、政府が本格的な全国調査に乗り出すことになった。73年の政府調査で全国の毒ガスの保管場所が明らかになっていくはずだった。しかし、住民に健康被害が

### 日本軍の毒ガス 相次ぐ健康被害

広がっている茨城県神栖町は保管場所のリストに載っていない。私たちの暮らしている近くにも、毒ガスは残っているかもしれない。毒ガスとはどのようなもので、健康被害を避ける方法はあるのだろうか。

【永山悦子、川上喜弘】

旧日本軍が製造した毒ガスは、どんなものがあるのか。化学物質評価研究機構（本部・東京野文京区）で化学兵器の研究に携わる花岡成行・技術第三課副長によると、「まい剤」「あか剤」「みどり剤」の3種類があるという。

### 「まい剤」……やけど

まい剤は「びりびり」のイースター染料、ルイサイトだ。皮膚に付くと極めてひどいやけどの原因になる。神奈川県の大森町で確認された。イースター染料は、かつてはニッケルの化合物が主成分の液体。すぐに症状が出す。数時間たつてからやけどに似た痛みや大きな水ぶくれが現れる。多量に浴びなければ、致死性は低いとされているが、ルイサイトは、同じようにやけど様の症状を起す。低温でも凍りつくため、旧日本軍は

### 「あか剤」……せき、おう吐

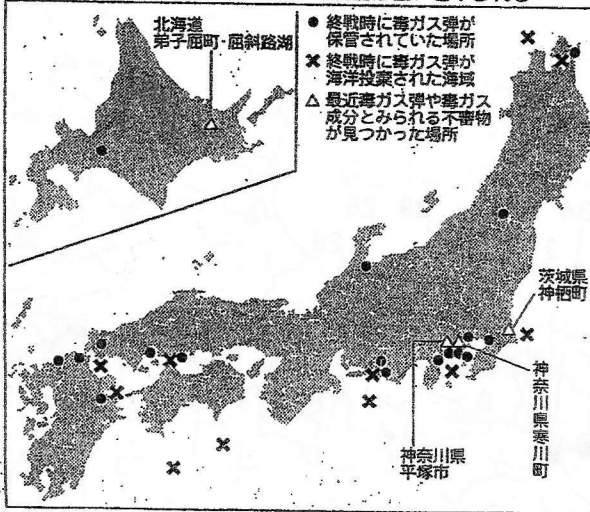
あか剤は「あか」のイースター染料、ルイサイトだ。皮膚に付くと極めてひどいやけどの原因になる。神奈川県の大森町で確認された。イースター染料は、かつてはニッケルの化合物が主成分の液体。すぐに症状が出す。数時間たつてからやけどに似た痛みや大きな水ぶくれが現れる。多量に浴びなければ、致死性は低いとされているが、ルイサイトは、同じようにやけど様の症状を起す。低温でも凍りつくため、旧日本軍は

### 「みどり剤」……催涙

みどり剤は「みどり」のイースター染料、ルイサイトだ。皮膚に付くと極めてひどいやけどの原因になる。神奈川県の大森町で確認された。イースター染料は、かつてはニッケルの化合物が主成分の液体。すぐに症状が出す。数時間たつてからやけどに似た痛みや大きな水ぶくれが現れる。多量に浴びなければ、致死性は低いとされているが、ルイサイトは、同じようにやけど様の症状を起す。低温でも凍りつくため、旧日本軍は

# よみがえる「負の遺産」

注) 73年の政府調査では、下図のほか宮城県、茨城県、栃木県（益子町）、群馬県、福井県でも毒ガスの存在の可能性が指摘されているが、いずれも危険性は低いとみられる



## 政府、全国調査実施へ

「水質を調査したり、体調変化や水中生物の異常行動など、危険の兆候が出ていないか見極めてはし」と呼びかける。もし異常があれば、行政機関が調査し、本格的な全国調査の実施を決めた。国内に残されている資料のほかに、米国の公文書も調べ、今秋までに毒ガスの保管・処理状況をまとめる。中央大の吉見義明教授（日本近現代史）は「時間が経過しても危険は存在しており、政府は毒ガスの実態を徹底的に調べなくては」と話す。

## 地下水は要注意 埋蔵物から毒性溶出も

最近、毒ガスが問題になり、住民に健康被害が出ている。茨城県神栖町（G）の3カ所だ。神栖川の水が、埋蔵物の毒ガスを吸い取り、住民の健康被害が出ている。茨城県神栖町（G）の3カ所だ。神栖川の水が、埋蔵物の毒ガスを吸い取り、住民の健康被害が出ている。茨城県神栖町（G）の3カ所だ。神栖川の水が、埋蔵物の毒ガスを吸い取り、住民の健康被害が出ている。

北 宏一朗

— 土壌も地下水も毒ガスで汚染されていた —

2005年2月環境省は、平塚(旧相模海軍工廠化学実験部跡地)の土壌が毒ガス成分で汚染されていることを発表した。跡地北部の3ヶ所からモノフェニルアルソン酸(PAA)が検出され、当該地域を立入禁止(芝でおおわれている)にし、調査を継続中としている。

モノフェニルアルソン酸(PAA)とは、毒ガスの2号特薬(陸軍・あか剤)・ジフェニルシアンアルシン及びジフェニルクロロアルシンが環境中で段階的に分解し、ジフェニルアルソン酸を経てモノフェニルアルソン酸になる。この毒性は人体に対して明らかになっていないが嘔吐、下痢、協調運動障害等が言われている。この現場付近で昭和42年、中身不明のドラム缶(200<sup>リットル</sup>1)が発見され、工事中の作業員のくしゃみがひどかったとある。

環境省は発表していないが、この現場近くで昭和45年5月クシャミ剤(2号特薬)らしきものドラム缶1本が発見され、さらに北側、八幡公園近くで、クシャミ剤の原料・フェニル亜硫酸50tが発見されている。

昨年3月には周辺井戸(216ヶ所)の検査結果7ヶ所から有機ヒ素化合物が検出、うち1ヶ所からジフェニルアルソン酸が、3ヶ所からモノフェニルアルソン酸が検出され、全てからフェニルメチルアルソン酸が検出された。環境省は要調査地域を北側に拡大し、20ヶ所程の地下水調査を年4回実施するとしている。

毒ガス成分による地下水、土壌の汚染は深刻である。平塚の場合、土壌の検査は化学実験部跡地の周辺、外周の一部にすぎません。過去何度となく発見された跡地外の場所も含めて調査すべきでしょう。以前記したことの繰り返しになりますが、2号特薬(あか)嘔吐剤、くしゃみ剤は相模(相模海軍工廠の当時の呼称)平塚工場が抜きんでいました。寒川本廠23,850tに対し、平塚は約3.5倍の73,835t(GHQあて9月9日保有状

況、北里又郎海軍中佐報告書)平塚工場は寒川に本廠を置くはるか以前から海軍技術研究所化学研究部として毒ガスの研究、製造を行っていました。元工員の話では7科16工場2号特薬(ジフェニル青化砒素)の型薬造修、充填が行なわれていた。(昭和16年から)更にクシャミ剤の特薬実験として、ジフェニルシアンアルシンを軽石に浸透させ円筒形の容器に入れて下部から燃焼剤によってガスを発生させる。これを所内及び相模川四ノ宮河川敷で実験を行ったという。この7科16工場は北側に位置し、土壌汚染が危惧されている所でもある。あらためて2号特薬(あか)くしゃみ剤、嘔吐剤の毒性を記します。ジフェニルシアンアルシン(DC)、ジフェニルクロロアルシン(DA)、アダムサイトのような有機ヒ素化合物(ジフェニル青化砒素)があり、低濃度で鼻、喉、目の粘膜に激しい刺激を与え、くしゃみ、咳、前頭部に痛みを感じ、高濃度では呼吸器深部を冒し、嘔吐、呼吸困難、不安感を生じ死に至る例もある。(日本学術会議報告平成13年7月より)中小口径化兵弾、筒、6番1号陸用爆弾ニ型(60kg爆弾)、更に発煙兵器に2号特薬を加えたものなどがあり、容器も、ドラム缶、ベークライト製、陶器等がある。毒ガスの成分は戦後60年たっても変わらず、遺棄・隠匿された毒ガス兵器は今も生きており、いつ私達に襲いかかってくるかわかりません。発見・無害化は一刻を争う。これ以上政府の怠慢は許されない。

(追) 環境省2月22日発表

茨城県神栖町の毒ガス汚染源として考えられるコンクリート様の塊3ヶ所(東西10m×南北8m×深さ2m、東西1.2m×南北3m×深さ1.5m、東西1m×南北2m×深さ0.5m)発見。井戸水を高濃度の毒ガス(ジフェニルアルシン・あか)で汚染、環境基準の数倍に値する数値が出ている。健康被害を訴える住民は数百名、国が認定したのは119名にすぎない。被害に対する補償は無に等しい。

(2005.4.15)

(補1)

— 遺棄毒ガスによる深刻な健康被害 —

海軍の秘密毒ガス工場(相模海軍工廠・寒川、海軍技術研究所・平塚)では最大3000名以上の徴用工、動員学徒、女子挺身隊、そして朝鮮から強制連行された人たちが毒ガスを含む化学戦の製造に従事させられ毒ガス等に被災した。しかしながら多くの被災者の状況は今もって不明のままである。被災者は慢性気管支炎、肺がん等の疾病に苦しみ続け、無念の想いで死亡しているのが現状です。そして毒ガス工場で製造された兵器としての毒ガス弾、その原材料は戦後隠匿、遺棄され、国内はもとより、中国大陸で多くの被害者をうみだしている。中国では2003年8月チチハル市の工事現場で、びらん性毒ガス、イペリット(マスタード)入りのドラム缶5個が掘り出され、その漏洩により1人が死亡43人が負傷するという大惨事が起き、被害者は日本政府に対し恒久的な医療保障を求め提訴も視野に入れ政府に責任ある対応を求める(東京新聞6月28日付)としている。チチハル事故の被害者の約7割が10代から30代で将来の症状悪化におびえながら生活している。中国大陸に遺棄した毒ガスは200万発以上、遺棄毒ガスによる被害者は2,000人以上にのぼる。

— 寒川、平塚、神栖での健康被害は —

私達はことあるごとに寒川(建設現場作業員11名負傷)、平塚(3名負傷)、茨城県神栖町(毒ガス成分に汚染された井戸水を飲用し、慢性有機ヒ素中毒になった135名に健康手帳交付、被害を訴える住民は数百名に及ぶ)の健康被害の詳細を公表する様求めてきましたが、「個人のプライバシーの問題」としてとりあわれず、寒川、平塚は「快方に向っている」と言われ続け、更に神栖町の「汚染米」に関しては「安全」とされてきた。しかしながら事実は異なっていた。

土壌、地下水が毒ガス成分で汚染され、そこからとれる農作物は当然汚染される。

2004年9月神栖町の農業井戸と2004年産米の一部から有機ヒ素が検出され、出荷自粛。しかし2003年米は「安全」とされ無検査で流通していた。この段階で周辺井戸は毒ガスの嘔吐剤(あか・2号特薬)の成分ジフェニルシアンアルソン酸に高濃度で汚染

されており、農作物への影響が考えられてしかるべきだった。結果2005年5月神栖産米を食べた41人から有機ヒ素が検出され、健康被害の拡大をまねいている。有機ヒ素はわずかな量でも長期間摂取すると遺伝子(DNA)に作用し発ガンリスクが高くなる。中枢神経障害、小脳失調、脳血流低下の症状が神栖町の生体影響では顕著であり、汚染が低濃度で現在症状がなかったとしても、経過観察が必要だし、未認定の数百名の地域住民を無視する環境省の認定制度は論外である。平塚の場合30年前まではほとんどの家庭で井戸水を飲んでいて、地下水、土壌の汚染が確認された今、過去にさかのぼって健康調査が必要とされている。

2002年9月25日~30日にかけて国交省さがみ縦貫道建設現場(寒川町)で作業員11名がびらん性毒ガス・イペリット(マスタード)と催涙ガス・クロルアセトフェノンの入ったビール瓶(キリンビールと書かれている)の破壊により被災した。発表は11月、被災者は10日後に病院へ、皮膚のびらん、のどの痛みが激しくなるも対症療法のみで毒ガスが原因とされ治療が始まったのは1ヶ月後、しかし、イペリットの治療法は現在に至るもなし。1年後も改善されず(11名のうち2名は染色体異常が認められ)2年間再発、軽快を繰り返している。「イペリットは発ガン性、催奇形性、慢性気管支炎などの後遺症の発生の報告があり、radiomimeticとも言われ、その作用は放射性に擬似し、染色体異常などが発生する報告がある」(日本学術会議2005年、3、23報告書)何故この様な重大な健康被害を隠すのか。

平塚で負傷した3名はどうか?シアン化水素(青酸)による呼吸器障害と塩素ガス(ホスゲン)による遅発性呼吸障害と医師によって所見が分かっている。何故なのか

想定される毒ガス成分のみの検査(発見された385本(2004.3.22記者発表)のうち101本からシアン化水素(青酸)検出)で不明の284本は無害化処理として内容も確認せず破壊処理されたため。この3名に今後どの様な症状が出るのか、国はどう対処するのか。責任は重大である。

(2005.7.15)

(補2)



# 安全・安心な街づくりはどこへ?! <神奈川県平塚市>

## ～環境省の行った住民無視の毒ガス原材料汚染土壌処理作業～

平塚毒ガス問題研究会 北 宏一朗

神奈川県平塚市には旧海軍の毒ガス・細菌兵器を主に研究・開発・製造していた海軍技術研究所、後に相模海軍工廠化学実験部（平塚市西八幡）があり、相模川対岸の寒川町にあった毒ガス工場相模海軍工廠本廠と共に戦中極秘の化学戦の拠点であった。

海軍技研・化学実験部跡地周辺からは、これまでに何度となく毒ガス兵器や原料が発見され、最近では新合同庁舎建設予定地だった平塚市美術館東隣（2003年～2004年に毒ガス瓶約400本発見）から青酸入り毒ガス瓶等が発見、処理されている。現在は駐車場になっているが、発見、処理されたのは一部であり、安全無害化宣言とは程遠いものである。

今回の毒ガス原材料、フェニル亜砒酸の白い塊と汚染土壌が発見されたのは、化学実験部跡地北方に位置する西八幡4丁目、(株)三共化成の事業所内で、土壌と地下水が有機砒素化合物で汚染されていることが確認され（2005年～2006年）＝注1、環境省は汚染土壌2千tを2007年6月～2008年3月末までに除去、無害化処理を終えたと発表した。

環境省と平塚市は、この処理作業について周辺住民に説明会を開くことなく、何の説明もないまま2008年3月31日の履行期限で8億1690万円（2008年1月10日付変更契約額）の税金を使って処理を終えたという。

### 注1 汚染土壌の説明

表層土壌からはフェニルアルソン酸(PAA)表層土中からはフェニルアルシンオキシド(PAO)の白い塊、ジフェニルアルシン酸(DPAA)、フェニルメチルアルシン酸が検出されました。これらは旧海軍が製造した毒ガス、特薬2号(あか剤)の原料であるフェニル亜砒酸に由来するものです。

### かつて野ざらし、毒ガス原料入りドラム缶500本

土壌除去作業が行われた場所では、毒ガス原料であるフェニル亜砒酸＝注2入りのドラム缶500本(約50t)というとてつもない量の毒物が、かつて野ざらしのまま放置されていました。陸上自衛隊第一師団(練馬)化学除洗隊々員64名が処理にあたり、横須賀武山まで運び、太平洋に投棄したとの記録が残っています。1968年(昭和43年)のことです。戦后23年間も工場(当時は共同化学平塚工場)のすみに野ざらしのままだったにもかかわらず、当時除去したのはドラム缶だけで、汚染された土壌や地下水に対して国も、市も何一つ対策はとりませんでした。それから40年、戦后60余年たった今日、ようやく土中の毒ガス原材料、汚染土壌約2千トンが処理されたということです。それも市民に説明することなく……。

汚染された土壌、地下水は長いこと放置されたままでした。平塚市では井戸水を長いこと飲用で使っていました。住民の健康被害はないのでしょうか、国も市も、このことをどう考えているのでしょうか。

### 注2 亜砒酸とは

亜砒酸は、かつて4大公害と言われた土呂久鉦山(宮崎県高千穂)慢性砒素中毒の原因となった猛毒です。土壌・地下水を汚染、人と環境にはかり知れない害毒をもたらしました。戦争中、土呂久鉦山では毒ガスの原料として亜砒酸は増産され、鉦山労働者はもとより、地域住民への慢性砒素中毒は拡大されました。茨城県神栖町の数百名に及ぶ砒素中毒もこの毒ガス原料の地下水汚染が原因です。

亜砒酸は「くしゃみ剤」とも呼ばれ、陸軍「あか剤」海軍の「特薬2号」「S剤」の原料であり、又、ルイサイト(死の露とも呼ばれ恐れられていた)「ただれ剤」の原料にも使われました。

### 市民に知らせない処理作業内容

(株)三共化成の事業所内土壌処理作業内容については、環境省、平塚市ともに一度も市民に説明会を開いていません。工場内の作業で一般市民には関係ないと言わんばかりの態度に終始しました。無害化処理施設も、方法も何も知らせず、さあ無害化しました、安心ですと果たして言えるのであろうか、熱処理をして有機砒素を無機化しても、砒素そのものの毒性を無害化することは現在の技術では不可能なことです。無害化＝無毒化ではない。

2千tもの汚染された土壌を何十台

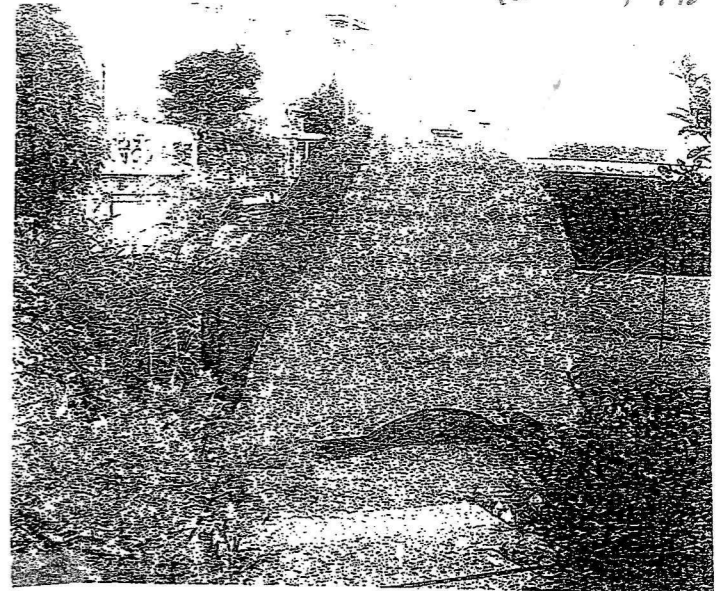
のトラックが日中、平塚の公道を走り廻り、何処に向かったのでしょうか、現場の脇は平塚総合公園です。市民の憩いの場ともなっている場所です。

環境省に情報公開開示請求すれば、黒く墨に塗られた書類の束が私共に渡されました。黒塗りの理由は処理事業を行った法人事業者・(株)鴻池組の技術情報だから開示しないというものでした。無害化処理したと称していますが、いったいどこで、どの様に処理されたのか、最終処分はどのようにになったのか、検証のしようがありません。約8億円の税金の使われ方を私たちは知る権利があります。

環境省、そしてただ言われるままに傍観していた市当局。生命に関わる重大な問題で市民生活の安全を脅かし、多額の税金を投入したあげく、何の説明も行わない行政の責任は重大であり、私達は改めて追求しなければなりません。

私達は平塚市が海軍の毒ガス、化学兵器の研究開発、製造の中核地区であったという戦争の負の遺産のある街である事を深く認識し、今も、これから先も注視し続ける意志を持ち続けなければならないと思います。

<2008年9月>



「海軍技術研究所科学研究部」跡に立つ碑

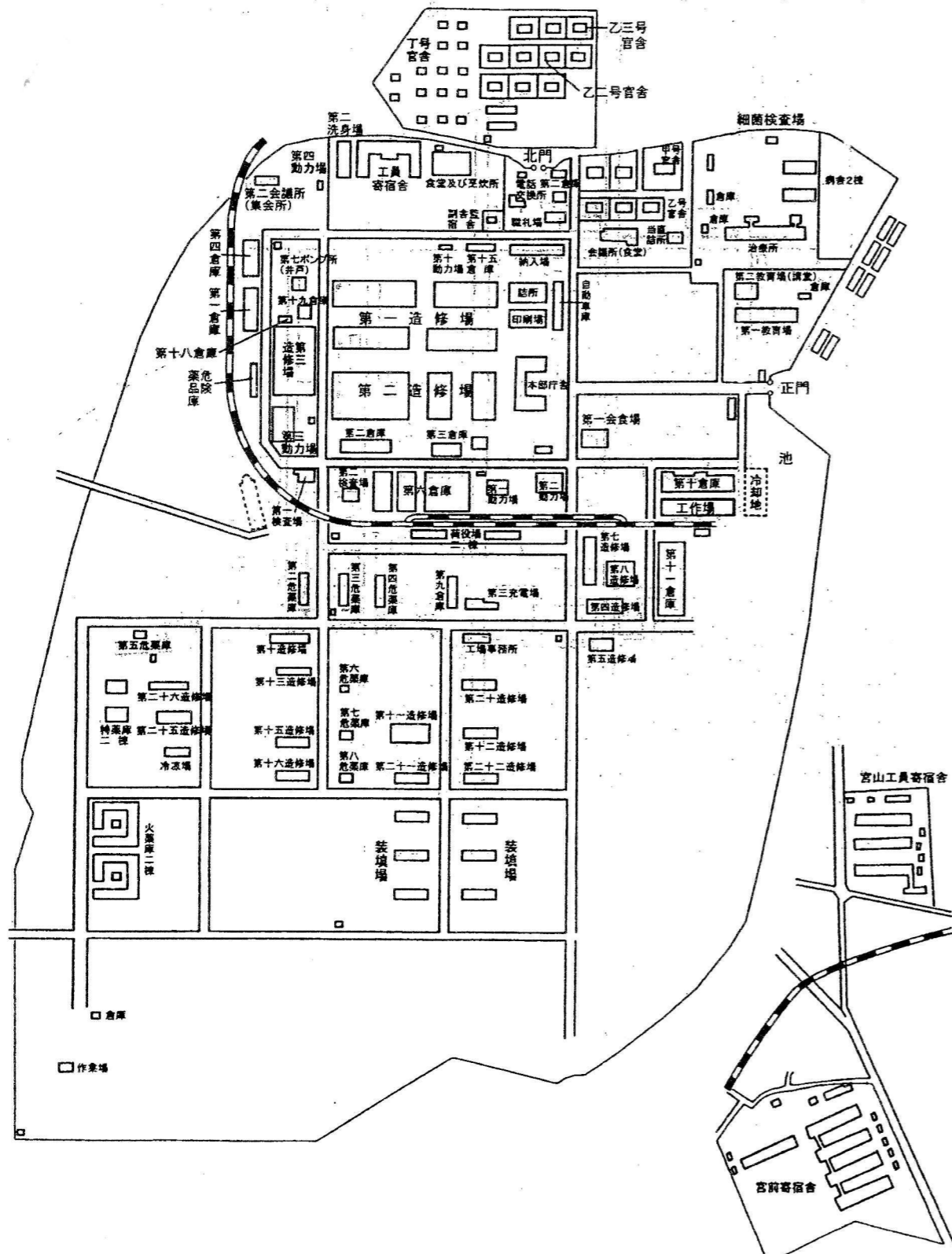




旧相模海軍工廠は、イペリット爆弾等の化学兵器や火工兵器の本格的な量産を目的に、海軍技術研究所の化学研究部から昇格した工廠であり、その本廠を現在の寒川町一之宮に置くとともに、寒川町の本廠以外にも、化学実験部（平塚工場）を海軍技術研究所に置き、海軍技術研究所を引き続き使用することとなった。防衛庁防衛図書館所蔵資料では、寒川町の工廠の名称は相模海軍工廠寒川本廠と、平塚の化学実験部の名称は相模海軍工廠平塚工場とされており、その建物配置図は、次のとおりである。

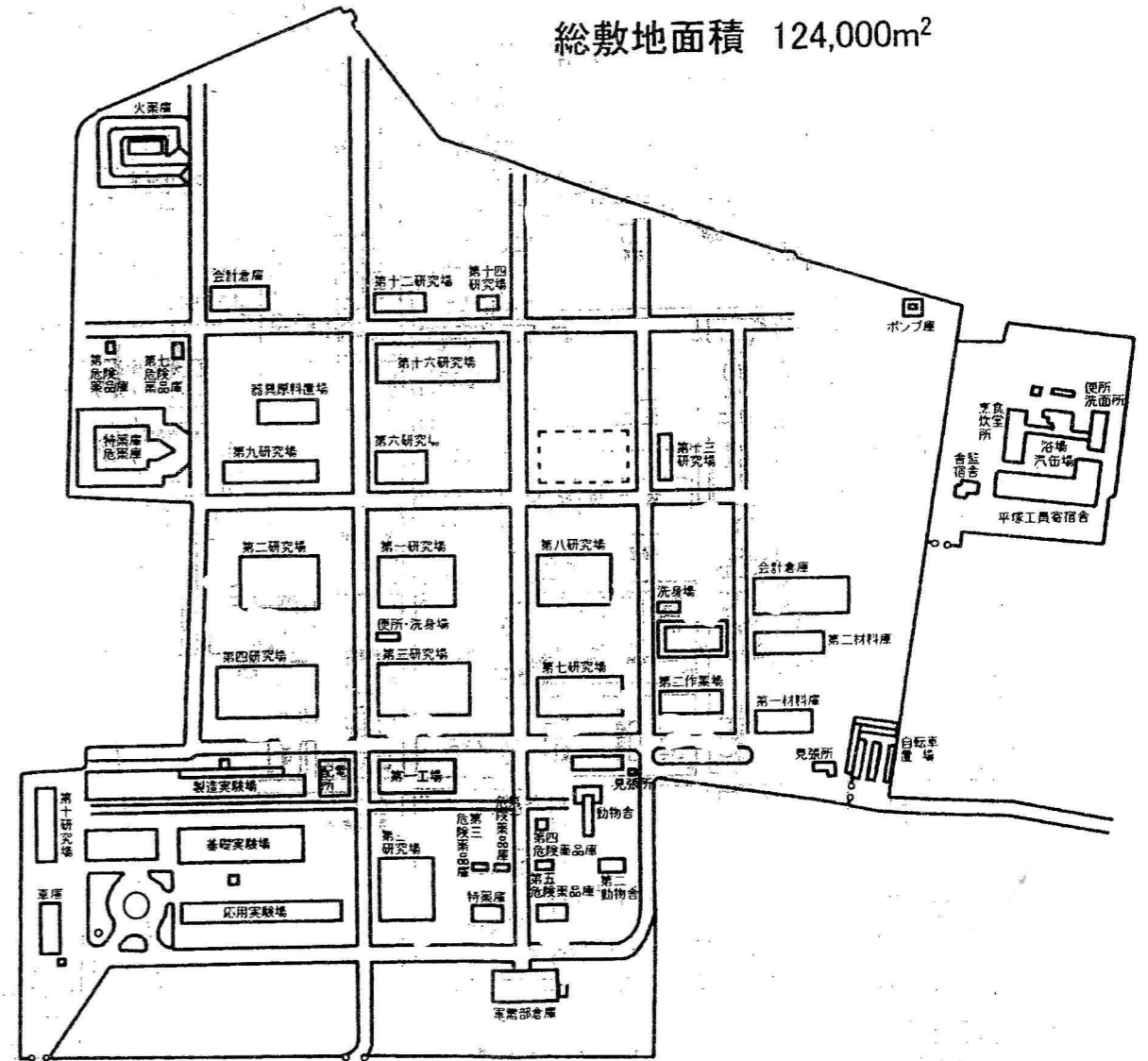
相模海軍工廠寒川本廠建物配置図

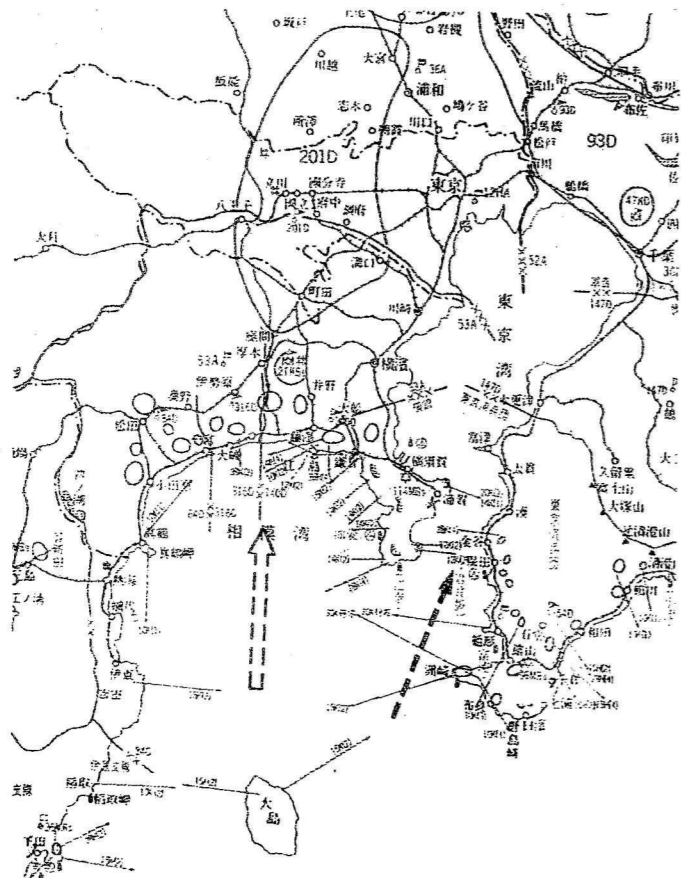
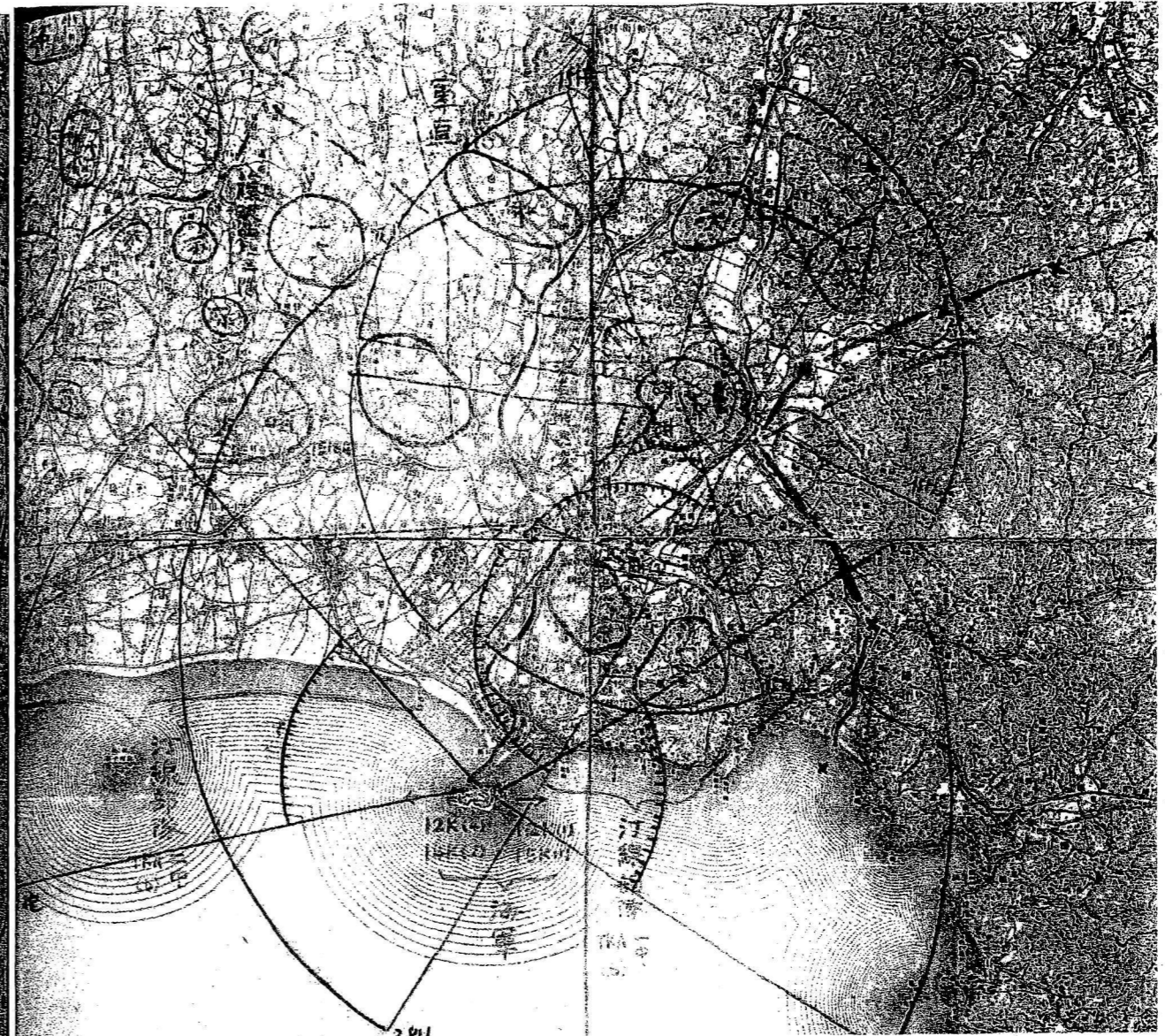
総敷地面積 704,000m<sup>2</sup>



相模海軍工廠平塚工場建物配置図

総敷地面積 124,000m<sup>2</sup>





19 日本軍本土防衛配置図（湘南地域に配備された汀線陣地配備図）（防衛庁防衛研究所所蔵）

相模川に沿って上陸侵攻する敵に対し、汀線及び内陸部に多数の部隊を配備し、江の島・鎌倉山と大磯（千畳敷山）の重砲によって側面から攻撃しようとしていたことがうかがえる。

20 第53軍各師団配備図（防衛研修所戦史室『本土決戦準備1』付図2）

第53軍の作戦地域は、北鎌倉駅-杉田を連ねる線以南の三浦半島・横浜市及び川崎市を除く神奈川県と富士川以東の静岡県域、及び浅川及び合流点以東の多摩川以南の東京都にまたがる地域で、ここに第84師団（師団長、佐久間為人中将 通称「突部隊」、1944年7月6日大阪で編成、小田原に司令部）、第140師団（師団長、物部長銜中将 通称「護東部隊」、1945年2月28日東京で編成、片瀬町に司令部）、第316師団（師団長、柏徳中将、5月23日京都で編成、伊勢原に司令部）が配備された。

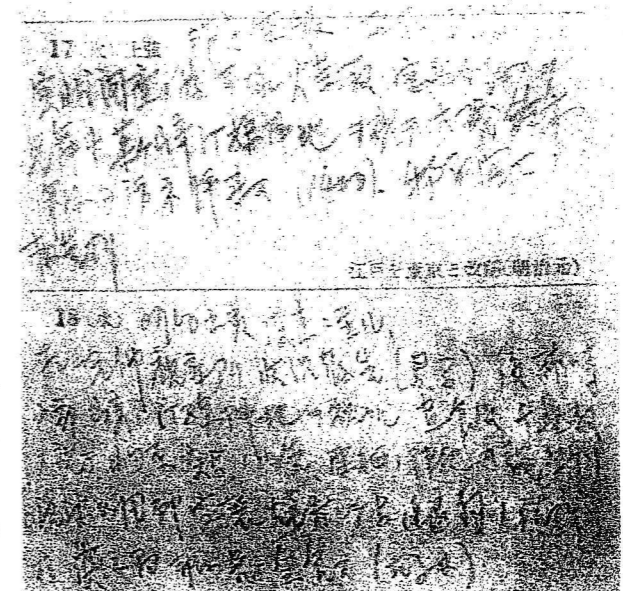


21 第53軍司令官赤柴八重蔵中将（1894年～1977年）

敵侵攻を相模湾正面と確信し、汀線陣地の構築を指令した。戦後は神奈川県終戦業務統制委員長としてマッカーサー率いる連合軍の進駐を受け入れる警備にあたった。（赤柴元五郎氏提供）

22 赤柴司令官「昭和二十年53A重要日誌」（赤柴元五郎氏提供）

赤柴八重蔵第53軍司令官は1945年敗戦まで日々綴った日誌を残している（赤柴元五郎氏所蔵）。ここには赤柴司令官の相模湾防衛に奔走する活動がつぶさに記されており、7月17日、18日の項には平塚空襲や杉山元陸相の龍口寺への視察などの記述がある。





# 池子の森の遺棄毒ガス問題

(池子弾薬庫と隠された毒ガス兵器)

北 宏 朗

終らない戦争 (隠匿された毒ガス兵器)

—相模海軍工廠・寒川と平塚にあった秘密の毒ガス工場

## 池子の森 (米軍住宅追加建設予定地) に秘密毒ガス充填工場

はじめに

池子の森を破壊して建設運用されている米軍池子住宅と、新たに建設が予定されている横須布城(六浦側)は、かつて帝国海軍の火薬庫、弾薬庫として使用され、敗戦後は、米軍の弾薬庫として機能しました。

帝国海軍は巨大な火薬庫、地下弾薬庫に、平塚・寒川の秘密毒ガス製造工場にて兵器化した毒ガス兵器、60kg陸用爆弾(びらん性毒ガス・イペリット)、中・小口径用各種砲弾の型薬(ぶら性毒ガス)、催涙性の毒弾等を本土決戦用に配備しました。更に各種毒ガス原料を持ち込み毒ガス弾に充填する作業を行っていました。戦後、これらの毒ガス弾、型薬、原料は、どう処理されたのでしょうか？戦後処理で作成された各種文書は矛盾に満ちており、実際どう処理されたか一切不明です。

敗戦後、弾薬庫は米軍に接収され、使用されました。二度にわたる大爆発事故(昭和22年、1947年)を起し、多数の死傷者を出しました。ベトナム戦争時には、毒ガス弾の搬出入が繰り返され、致死性の毒ガス、サリン、VXガス等を充填した各種毒ガス砲弾が何度となく運びこまれました。

1969年沖縄心毒ガス漏れ事故(起り)、米軍の毒ガス配備が明らかになり、(15台トラック800台分、168千本)沖縄の人々の怒りは頂点に達し、後の74年暴動につながります。その毒ガスが1973年4月、140本の弾薬と共に、池子に搬入されました。(総貯蔵量は約1万2千本にのぼる) その後、これらの毒ガス弾は、どう処理されたのか、漏えい、汚染はなかったのか、これらの検証は行われていないのが現状です。

戦時中、極秘に研究・開発・製造・実験配備され、使用された陸・海軍の毒ガス兵器、細菌兵器の製造にまつわることは、戦後隠ぺいされ続けられました。米側に提出した多くの軍関係資料に毒ガス、細菌の記載が極端に少ないのは、軍当局の「戦犯を隠す」、戦犯に与らぬ「米の風評統一」のためと、日米当局の「取引先」の結果です。

一億玉碎、本土決戦に配備された各種毒ガス兵器が、今も全国各地に隠されておられるに違いない。池子の森の地下深く、何が隠され、何故隠し続けるのかを明らかにしなくてはなりません。池子の森の過去と現在に目を向け、直視し、未来に残す池子の森の破壊を一切許さず、被害の責務を思い、

No.1

2003年11月環境省は「旧軍毒ガス弾等に関する全国調査結果」をとりまとめ、国内138事案を発表。更に今年になって7ヶ所の新規事案を追加、合計145ヶ所が、毒ガス保有・廃棄関連事案とされ調査を行なっているという。国は閣議決定(2003年12月)で「遺棄毒ガス問題を各省庁あげて全力で取り組む」としたが、はたしてそうであろうか。

寒川・平塚は国交省の工事現場、おびたしい量の毒ガス(びらん性毒ガス、イペリット、ルイサイト、致死性の青酸等)が発見され、負傷者も寒川で11名、平塚で3名出ている。現場はとりあえずの無害化安全宣言がなされたにすぎず、恒久的な安全宣言ではない。国交省の工事現場の一部地域のみであり、平塚市が求めた「恒久的な安全対策」要望書は、国交省の窓口になぞらしのまま今もって回答はない。負傷者に対する医療体制も補償も、ほとんどなされていない。(個別の労災適用)のが現状。茨城県神栖町の毒ガス被害の深刻さに対し、国の対応は「ひどい」の一言。高濃度の毒ガス成分、ジフェニルアルシン酸有機ヒ素化合物を飲料水として飲んでいた数百名の住民の健康被害に対し、認定・未認定と線引きをする制度を作り、多くの健康被害者を無視する政策を行なっている。補償も含めた医療体制の不備は被害者とその家族を含む関係者を絶望のふちに追いやっている。

### 池子の森にあった毒ガス充填工場

環境省は今年3月、国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会(第12回)を開き、新規事案として7ヶ所を追加発表した。その中に横浜市(横須賀海軍航空部第2工廠造兵部谷戸田注填工場)の事案がある。現場は、逗子市と横浜市にまたがる「池子の森」、海軍の倉庫弾薬庫があり、戦後米軍に接収、弾薬庫として使われていたが現在は逗子市側に米軍家族住宅が建っている。谷戸田は池子の森横浜市六浦側にあり、現在米軍住宅増設計画が進められて

いる場所でもある。ここには海軍第2工廠造兵部谷戸田注填工場があり、相模海軍工廠で作られた毒ガス原料を各種砲弾、弾薬に充填、毒ガスは特薬1号(催涙)、2号(嘔吐、あか)、3号(びらん、イペリット)等である。現場は丘陵地帯の森、谷戸には弾薬庫として横穴があり、地下工場としての地下壕もある。この掘削作業は敗戦後まで続き、未完成のものも多数ある。強制連行された朝鮮の人達、徴用工、学徒が強制労働させられた。

池子の森の逗子久木地区には環境省、逗子市の事案(神奈川県14-8)があり、久木1号倉庫には「手投催涙弾甲」大4,000発、小6,000発催涙缶25個を保有とある。久木1号倉庫は、「横須賀海軍軍需部引渡目録」の配置図に示され手いるにもかかわらず、未だ確認されていない。更に逗子市、横浜市の事案(神奈川県14-11-3)には、池子にあった海軍軍需部に相模海軍工廠で作った6番1号爆弾、(60kgイペリット爆弾)が2,496発保有、他に中口径砲弾用型薬缶(2号特薬、あか、催涙)がある。相模海軍工廠の技術大佐は3号特薬(イペリット)を瀬谷、池子と大分県耶馬溪の洞窟に貯蔵したと自著に記している。今回発表された新規事案「福島県内の事案」にも元相模工場員の証言として「戦後、寒川からイペリット200kg入りの容器を福島県南部山中の大きな隧道に運び入れた。本数はトラック10台分ぐらい」

国際法違反の毒ガス製造を隠蔽する為に軍は海に、川に、山中に隠した。又、本土決戦用に作られた毒ガス兵器も各地の地下壕に隠されたままになっている。現在特殊地下壕調査が行われているが、陥没、落盤の危険性に加え地下壕内の毒ガス兵器、原材料の発見調査をするべきではないか。神奈川県は本土決戦用に多くの地下壕が作られている。(県発表592ヶ所)。

No.2

# 池子弾薬庫と毒ガスの関係

## 1) 池子弾薬庫 毒ガス問題の発端

2003年11月環境省「旧軍毒ガス弾等に関する全国調査結果」を発表。報告書の中に池子池子久下地に毒ガス保有の可能性が記載され、更に2005年3月「国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会(第12回)を用い、新規事案として前回138事案に74件を追加発表した。その中に横濱市の事案として各戸田工場工場事案の記載された。戦前60年、旧軍(海軍)の毒ガス兵器の存在が明らかになった。

## 2) 敗戦時の池子弾薬庫と毒ガス

各種資料・証言から海軍は本土決戦用に備蓄していたとみられる。

昭和20年9月9日作の海軍中佐北里又郎報告書(GHQ宛)によれば横須賀(池子・瀬谷)には1000発の毒ガス弾 10,000発 中口径砲用型薬缶(くしゅう薬缶)約30,000個 催涙5200kgの存在

GHQ宛報告書以外にも多く反響が注目を集める必要のある。海軍毒ガス研究・製造の責任者であった鶴尾海軍大佐は戦前回想録「戦時中の海軍化学戦部隊の経験」に「毒ガス兵器の製造・貯蔵・輸送の文書資料、兵器及び原材料の隠匿が組織的に行われており、

このため今も池子に毒ガス兵器(毒ガス)被災の問題の中心にある。戦前加斗池子には2007年に前記全国調査が行われ、1945年～2003年まで生産保有344所 廃棄・遺棄444所 調査対象1384件 被災者823件(うち被災624件、死者11名、負傷者355名、不明多数)という数字が見られる。状況の深刻さがうかがえる。国の不作為による被害の拡大、環境破壊、汚染土壌、地下水汚染、池子の森に何か隠されたもの、明らかになったもの、

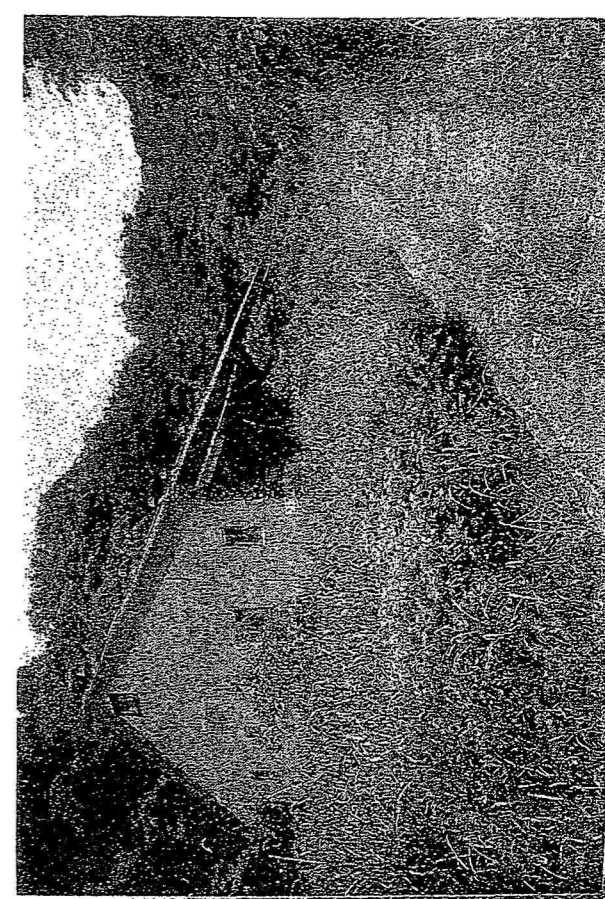
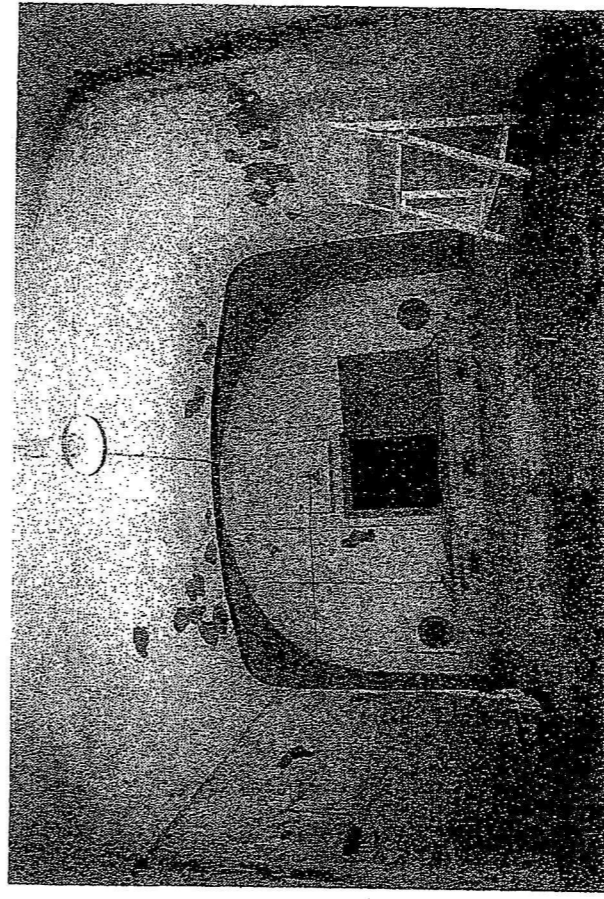
## 3) 米軍占領下の池子弾薬庫と毒ガス

昭和22年11月17日弾薬庫爆発、11月24日再爆発 死者1名 負傷者7名の発生。7日コバの中心報道記事で詳細は不明だが、市民は危機と隣り合わせの生活を強いられることになる。

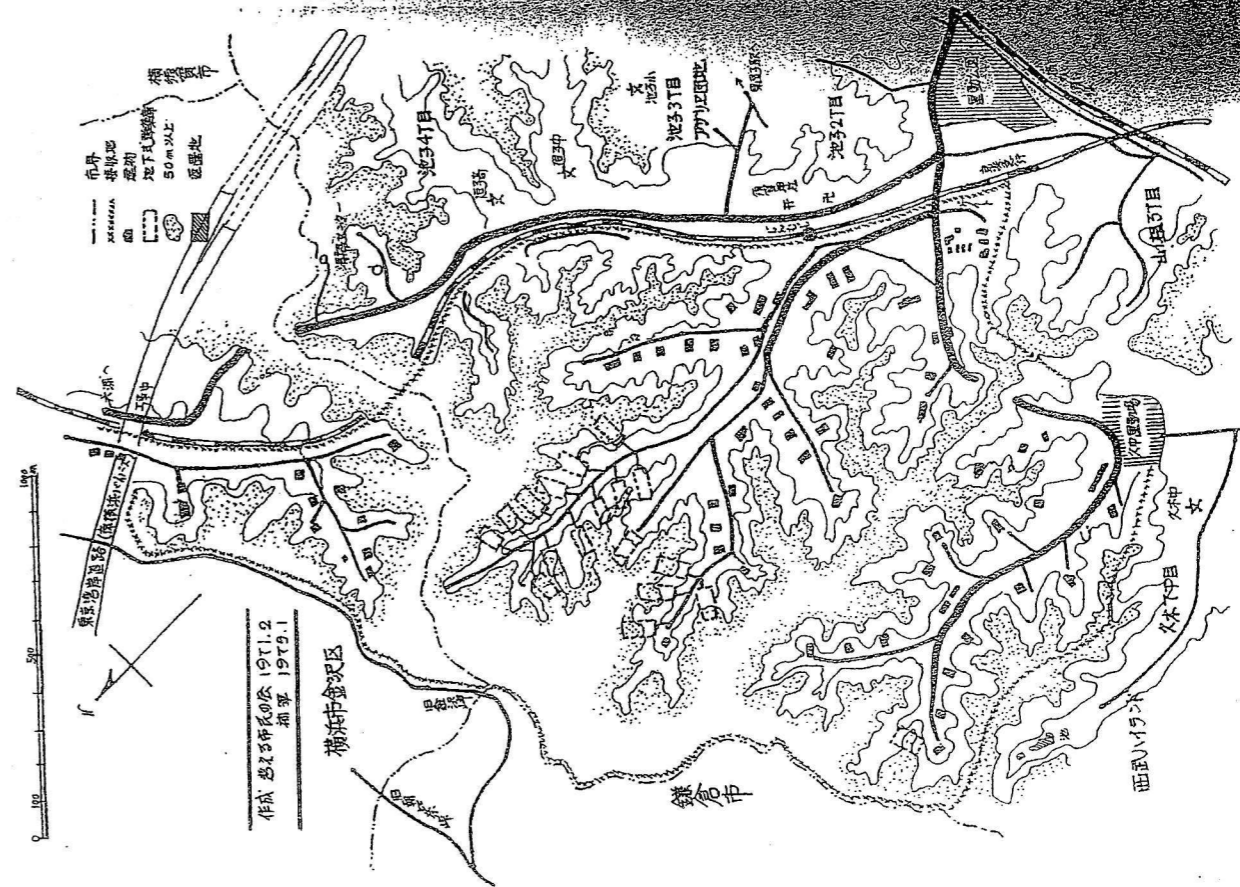
神奈川毒ガス痛出事故の起り(被災525人が負傷)神奈川に大量の毒ガス兵器が配備されたこと、判断 八ヶ岳戦争時 1969年7月のこと。毒ガス兵器 VX、サリン、パルビオン(229-D)の搬入(?)が2年おこなわれた。池子に、1973年4月突然弾薬搬入が始まった池子に大量の毒ガス兵器が運び込まれ、その毒ガス兵器を貯蔵していた。(125個の地下貯蔵庫 405個の搬入)

## 4) 毒ガス問題解決のため

国の不作為は許せない。環境省は池子弾薬庫全域の徹底した調査を行うべきである。



トンネル型弾薬庫の入口 (上) 朽ちた屋外弾薬庫 (下) (提供: 大木茂氏)



第三章 全市一体で返還促進に立ち上がる

池子弾薬庫概略地図



